

自立訓練を経て就労移行支援を利用し

一般就労につながった事例の報告

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設

就労・生活支援員 松本 香里

サービス管理責任者 上川 毅、諏澤 友紀子

職業指導員 山口 和彦、森田 拓哉、吉川 早苗

キーワード： 自立訓練、就労移行支援、就労定着支援、一般就労

要 旨

脳出血後遺症により、上下肢機能の障害・高次脳機能障害等を伴う場合、復職することが難しく、新たな就職先探しは更に困難を伴うケースが多くみられる。重複障害のある方が、当施設自立訓練、就労移行支援、施設入所支援を利用して一般就労し、その後も就労定着支援を行うことで、安定した職業生活を送っている事例を通じ、段階に応じて適切な支援を行うこと、身体機能、高次脳機能障害双方に対する支援の必要性を確認できた。

1. はじめに

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設では、施設入所支援、自立訓練（機能訓練・生活訓練）、就労移行支援、就労定着支援を行っている。施設入所支援では、日中活動の通所利用が難しい場合に、生活の場や生活自立に向けた訓練の場として利用している。

機能訓練では、交通事故や脳血管障害などにより身体に障害のある方を対象に、身体機能や体力の向上、日常生活能力や外出能力の向上、趣味の開発などの訓練を行い、地域で自立した生活ができるよう様々なリハビリテーションを実施している。生活訓練では、高次脳機能障害のある方、発達障害者を対象に、日常生活能力の向上や社会参加を支援する生活訓練を行っているが、身体と高次脳機能障害を併せ持つ複合的な障害のある方には、機能訓練、生活訓練の枠を超え、双方から必要な支援を行っている。

就労移行支援では、身体・知的・精神障害・難病の方を対象に、一般企業での就労・復職・在宅就労

を目指し、必要性に応じて、事務系と作業系の訓練を行っている。事務系では、パソコンや書類整理等一般的な事務仕事に必要な訓練、作業系では、軽作業、仕分け、品出し等、主に身体を使う仕事の訓練を行う。障害別ではなく、全ての利用者が基本的に同じ環境下で訓練を行い、作業チェックも訓練生同士で行うことで、訓練を通してコミュニケーションの取り方を学べるよう考えている。清掃・ベッドメイキング・園芸・アンガーマネジメント・ビジネススキル・メンタルヘルス等外部講師を招いた講習もあり、職場実習等も積極的に行っている。

就労定着支援では、定期的な職場訪問等を通して、本人の仕事や生活の様子を確認し、本人の不安や希望等を企業に伝え、また、企業が心配していること等を本人に伝えて問題の早期発見、解決を支援することで、職場定着を図っている。

2. 倫理的配慮

倫理的配慮として本研究は、かがわ総合リハビリテーションセンターの倫理委員会で承認を得た。

3. 事例紹介

A氏、40代男性、脳内出血による右上下肢機能全廃、高次脳機能障害、失語症。

発症後、急性期、回復期リハビリテーション病棟を経て、成人支援施設自立訓練・施設入所支援を利用開始した。父親が脳内出血で中学の時死去し、高校進学を断念。卒業後は溶接工として社員寮に住み込みで発症まで働いていた。

回復期リハビリテーション病棟退院時、FIM 115点、Br.Stage III - III - III、TMT-A 46秒、TMT-B 60秒、MMSE 26点/30点、FAB 13点/18点、リバーミード行動記憶検査14点/24点。短期記憶の低下や失語症が作業場面や情報処理に影響を与えていた。

4. 支援の状況

(1) 自立訓練

日課の参加状況は良く、特に外出訓練と失語症を対象としたコミュニケーションプログラムの取り組みは熱心であった。ADLは自立しており、復職の支援と通勤手段の確保を当初の目標とした。しかし、職場から片麻痺での受け入れは困難と退職勧告を受け、更に、自動車運転の再開も母親の拒否感が強く、能力的には可能だったが断念することとなった。自信、目標を喪失し、元来内向的な性格だったこともあり、誰とも話しをしない状態が続いた。「自分は仕事はもうできないと考えていたし、失語症により、上手く喋ることができず、人と話すのが怖い、恥ずかしいと考え、話したくないと思っていた。」と当時を振り返って話していた。

その頃、相部屋となった利用者を中心に、趣味の漫画を通じて人間関係が広がった。また、他の利用者と休みの日も連絡を取るために、これまで遠慮していた母親に携帯電話を使いたい旨を伝えることができた。関係の良い利用者が就職することを知り、本人も徐々に働くことを希望するようになった。そこで働くために必要な事として、通勤手段、生活の場所を確保し、入所から通所の切り替え、最終的には就労移行支援利用を目標とし

た。通勤手段は公共交通機関を利用し、生活の場所は母親との同居を選んだ。

(2) 就労移行支援

新たに一般就労を目指すためには、沢山の課題があった。課題ごとに個別に見ていく。

まず、右片麻痺での作業技術取得について、どの作業も始めはうまくできず、時間もかかっていた。同じ片麻痺のある先輩訓練生から作業方法を教えてもらったり、職員と効果的な自助具の使い方を考えたりしながら、少しずつできる作業を増やし、スピードも意識できるようになった。(図1) また、当初は消極的だった清掃講習も、片麻痺でも清掃で就職した人の事例を伝える等働きかけ、受講となった。



図1 滑り止めマット、洗濯ばさみ、空箱利用し、片手で箱折りを行えるように

高次脳機能障害に対しての代償手段の獲得のため、日課として取り組んでいる、ニュースをピックアップしそれを正確に書き写す「書き写し課題」(図2)、その日の訓練の内容と振り返りを行う「自己管理ノート」(図3)の記入を行った。毎日の振り返りの定着から、高次脳機能障害による記憶力の低下が徐々に認識できるようになった。また、書字の上達、メモの必要性の理解双方が向上し、メモの習慣化につながった。

失語症による発語のしにくさ、伝わりにくさの改善について、毎日の朝礼で就労標語(図4)を復唱しており、言葉をしっかりと発音する練習になるとともに、挨拶に関する標語があったことで、挨拶

取り、支援員による訪問回数を増やすなどし、早期解決に向け対応している。A 氏の仕事内容は、就職当初単独作業だけだったが、現在は、共同作業や他社員の検品を任されるようになっていく。

(図6) 社内には、障害特性から、ミスを指摘されると委縮してしまう社員もいるが、A 氏は穏やかにミスを伝えるので安心して任せられると、会社からの信頼も厚い。就労移行支援で、様々な障害の方と同じ環境下で訓練を行い、訓練生同士で作業チェックをしていたことが活かされていると感じる。また、身体障害を持つ A 氏が入社したことにより、他社員が社内を急いで移動しなくなる、できない作業は補ってあげようとする等、社内が良い変化をもたらされている。

A 氏は、受傷時には将来のイメージができない状態だったが、自立訓練で家庭復帰をし、就労移行支援を経て就職し、今は働くことがとても楽しいと話している。



図6 手前の二人が行った作業を、A 氏が検品し奥の人が束ねて梱包している様子

5. 考察

中途障害となった者は、身体機能を元に戻したい、身の回りのことを自分で行いたい、家庭、地域で暮らしたい、復職、就職等社会活動への参加をしたい等、時間の経過を経て課題、目標は変化していく。その段階ごとに、葛藤し、混乱し、適応しようと努力し、受け入れるという経緯をたどる。

成人支援施設では、各事業の職員間の連携を図りながら、段階に応じた課題、目標に対し、切れ目なく適切なタイミングで支援を行えるようにし

ている。

そのため、利用者は、施設入所支援を利用して行く間に、自立訓練通所者の様子や、就労移行支援の雰囲気を感じることができ、利用者間の交流もあるため、自らが取り組む訓練等の見通しが持ちやすくなる。

脳出血等による後遺症から片麻痺となり、高次脳機能障害を伴う場合、社会参加としての一般就労は困難を伴うことが多いが、回復期病棟退院後、当施設で、その時々課題に応じて訓練を受け、現在も安定した職業生活を送ることができているA 氏の事例を通じ、段階に応じた適切な支援を行うこと、身体機能、高次脳機能障害双方に対する支援の必要性が確認できた。

一方、現状として、重複障害を持った者が即マッチングできる就職先は少なく、賃金面でも健常者の一般レベルに比べ低いことがある。このような課題改善のためにも、今回のような段階に応じた支援による成功事例を複数作ることで、重複障害のある方が就労可能なことを一般企業にもアピールし、就職先を増やすとともに、少しでも多くの障害者の社会参加を増やしていきたいと思う。

【出典先】

令和3年度かがわ総合リハビリテーションセンター
研究年報